

小野田市大判山古墳発掘調査報告

恵 良 宏*

大判山古墳は、小野田市大字東高尾、通称大判山と呼ばれる丘陵の頂上に位置する。

古墳所在地の地理的環境は、小野田市の南部にそびえる龍王山の山裾が合地を形成して本山岬に向かってひろがり、周防灘に入る、岬の基部丘陵の最高部海拔42.5mの眺望のきく地点である。

元来、この合地上には数多くの古墳が築造されたが、昭和初年より現在に至るまで、ほとんどが開墾や本山炭坑社宅地造成による破壊を受けたため、ほぼ原形をとど

めるものとしてはこの大判山古墳一基を残すのみであった。しかし、大判山下の海面を埋立てて西部石油の工場が建設されることになり、附近一帯の丘陵の土砂を使用するため、大判山古墳も破壊されることとなった。そのため工事施行前に調査を行ない、ことに残存する石棺を掘り出して他所へ復元する計画が小野田市教育委員会で立てられたので、市教育委員会と宇部工業高等専門学校小川五郎教授を中心に調査が始められた。

しかしながら、本古墳はすでに明治20年代に、開墾の



* 宇部工業高等専門学校歴史教室

ために発見され、遺物もすでに発掘されている〔註①〕従って今回の調査のねらいは、墳丘の測量およびその封土の状態、さらに石棺の実測におかれた。ことにこの石棺が、凝灰岩によるくりぬき石棺かと推定されていたので〔註②〕、現在、この上に石塔が建立されて、いわゆる新四国の霊場の一つになっていて実見不可能であるために、この機会を利用して確認するのも目的の一つであった。調査は、昭和42年12月3日から開始され、翌43年の2月1日、ブルドーザで削り取られる迄、ほぼ3ヶ月間工事の合間をぬって行なわれた。

最初に、石棺上に立てられた凝灰岩製五層の石塔を除去する作業から始められたが、コンクリートによって固定され、石棺もその土台として使用されて居り、その作業は困難を極めた。従って取り除いてみると、すでに石棺の蓋石は失われており、石棺の側石もかなり破損していた。ちなみに、明治中期に発見の際は疊1枚程度の大きさの蓋石が見られたということである〔註③〕。

1. 石棺の状態と出土遺物

大判山古墳の主体ともいべき石棺は、先にもふれたように、すでに蓋石が持去られ、五重石塔建立時にも、幾分か改変を受けており、さらに今回においても破損したため、充分に実測できたとはいえない。しかしながら、大体について述べれば、大小4枚の母岩から切り出したままの粗面をもつ板石を組合わせた箱式石棺の形式で、南北の方向に構築され、内部の最長部分151.5cm、巾57cmの規模であった。(図参照)

先述のように、その石材が凝灰岩—通称豊後石—ではなく、単にこの本山附近の地層を構成する第三紀の砂岩であったことは、豊前・豊後地域との文化交流を物語るとされた先学の意見を改める結果となったといえよう。付言すれば、かつてくりぬき型と推定されたのも石棺の上縁をセメントで塗り固めたのを誤認したためと考えられるのである。

石棺内部は、同じく石塔建立時にセメントで固められ、その下の床面にも玉砂利が敷かれていたが、おそらくこの時の改変であろう。しかし本来は赤土をつき固めていたものようである。

副葬品は今回の調査では全く発見されなかった。しかし、かつての発掘では朱のついた人骨一体分、漢式鏡、刀剣等が出土したという〔註④〕。現在も附近民家に保存せられると聞いたが確認はできなかった。本古墳の年代推定の資料ともなるべき遺物がすべて散佚している現状である。従って遺物については全く不明である。

2. 大判山古墳墳丘の築造と規模および出土遺物

大判山古墳は本山地区における数多くの古墳の中でも、塚の川古墳とならんで規模の大きさと封土の量をほこるものである。

まずその外形の形式であるが、すでに昭和2年の調査において円墳と報告されていたが、墳丘の実測の結果、僅かながら北側に張り出し部分を有することが確かめられた。直ちに前方後円墳とすることはできないが、張り出し部分の先端が東西に一線画して段があり、そこからはゆるやかな傾斜面となって低くなるので、大判山山頂に本古墳を築造した際に、石棺をおさめた墳丘を造った後、いわゆる齋庭とでもいべき一区を設定したのではないかと推測している。この部分にトレンチを入れたが盛土はきわめて少く、20~30cmで直ちに地山に到達する。しかしここより土器片1個を採集した。極めて小片(3×4cm)で形状は復原できないが、焼成状態からは弥生式土器である。なおこの表面には靱の圧痕一、が見られる。張り出し部分については、以前この山頂が公園化した時に整地され若干削られたとのことである。

大判山古墳の規模についてその数値をあげると、上述の張り出し部分をふくめると全長約42.10m、円墳部直径23.50m、墳丘の高さ2.73mである。墳丘の高さについては石棺が露出するまでに頂上が削平されていたので、原形はもっと高かったものであろう。

図(8)の如く、この古墳は大判山頂に築造するに当り、山頂最高地点を中心に少量盛土し、石棺を構築して、さらに封土を盛り墳丘を造成したことが判る。その平面図の大きさにくらべて、規模の点において多量の盛土を要した古墳とはいえない。なお墳丘をブルドーザで削平する時、この断面を見ることができたが、中心部分に黒色土と赤土との交互の層が見られた。平面図ではQの地点である。

最後に、大判山古墳は、下関市安岡八幡宮境内古墳、下関市王喜区串の古墳、宇部市西新川古墳(破壊)に見られるような、箱式石棺に封土を伴う型式の古墳で瀬戸内海西部の沿岸地帯に分布する後期古墳を代表するものといえよう。ことに市内の本山、焼野、大須恵の竜王山周辺に存在する須恵寮群との関連が考えられ、この地域の多数の古墳とともに須恵部を統轄した人々の築造にかかわるものではないかと想定するのである。

註①「長門国厚狹郡小野田の上代遺跡」小川五郎・伊藤作一氏(山高郷土史研究会考古学研究报告書所収)昭和2年6月

註②註③論文中「第3章小野田古墳文化の考察」による

註③発掘作業に参加した地元民の談話による。

註④前記「長門国厚狭郡小野田の上代遺跡」第1章、大判山組合石棺、但し漢式鏡であったというのは、「小野田市史」による。なおこの他に土器が出土したという地元故老の談話を採集した。しかしいづれも現在すべて散佚しているので不明とするほかはない。

〔付記①〕参考のために「長門國厚狭郡小野田町の上代遺跡」より、大判山古墳に関する部分を抜粋する。

大判山組合石棺

位置. 小野田町字高尾山林1131番地ノ4.

地勢. 龍王山の東南、本山岬の端近く隆起する小丘の頂上に円墳がある、東は海に望み西は後地瀧大須恵を隔てまた海であって眺望佳良の地である。

現状. 円墳は高さ2間、径5間で其上に凝灰岩製箱形石棺がある。この石棺は内部横2尺、縦5尺2寸、深さ1尺6寸、石の厚さ4寸8分にて棺底には小石を並べ

たる形跡ありて同石質の蓋をなせしが如く思われる。備考. 此の石棺は明治20年頃伐木の際発見したるものでその時は朱の附きたる人骨、鏡、剣出土せりと伝うるも散佚して詳かでない。なお此の円墳と並びて円墳ありしという者おれど判明しない。

〔付記②〕本古墳調査終了後、石棺は近くの竜王公民館中庭に復原されることになった。

〔付記③〕今年2月厚東川にのぞむ台地上宇部市松崎で1基の円墳が発見されたが、大判山古墳と同様に合地上に構築した石棺に盛土した形式であった。刀剣、銅鏡が出土したとのことである。詳細は報告に期待したい。

〔付記④〕大判山古墳西下の斜面に1基の鏝が工事中破壊され、多数の須恵器が発見された。参考のために本報告書の末尾に一部を付載する。

(昭和14年4月15日受理)



図1 発掘前の大判山古墳(西方より)



図2 南面より見た墳丘



図 3 石棺上に構築されていた石塔の祠

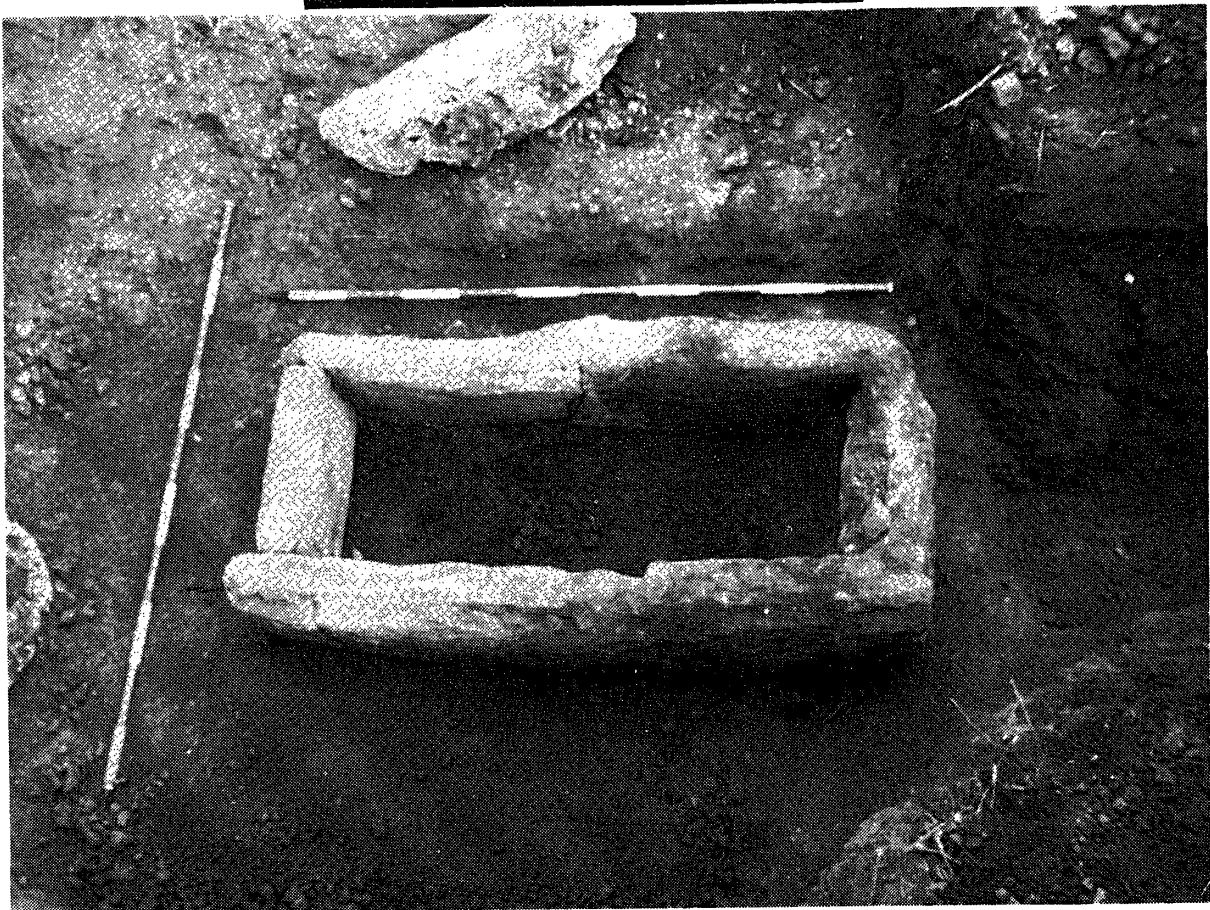


図 4 石棺(上方より)



図5 石棺(側面より)



図6 墳丘のトレンチ



図7 石 棺 (側面より)

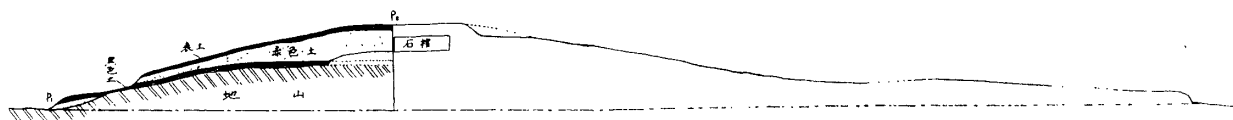


図8 墳丘断面図 (P₁~P₂)

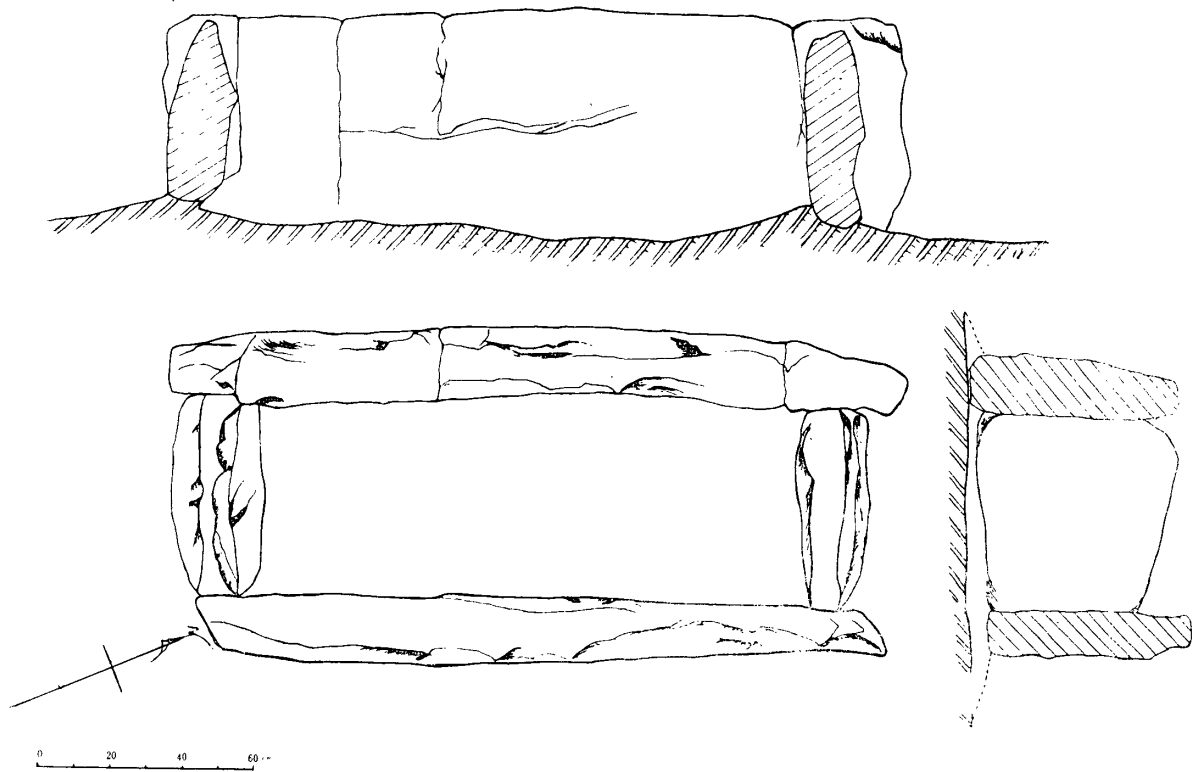


図9 大判山古墳石棺実測図

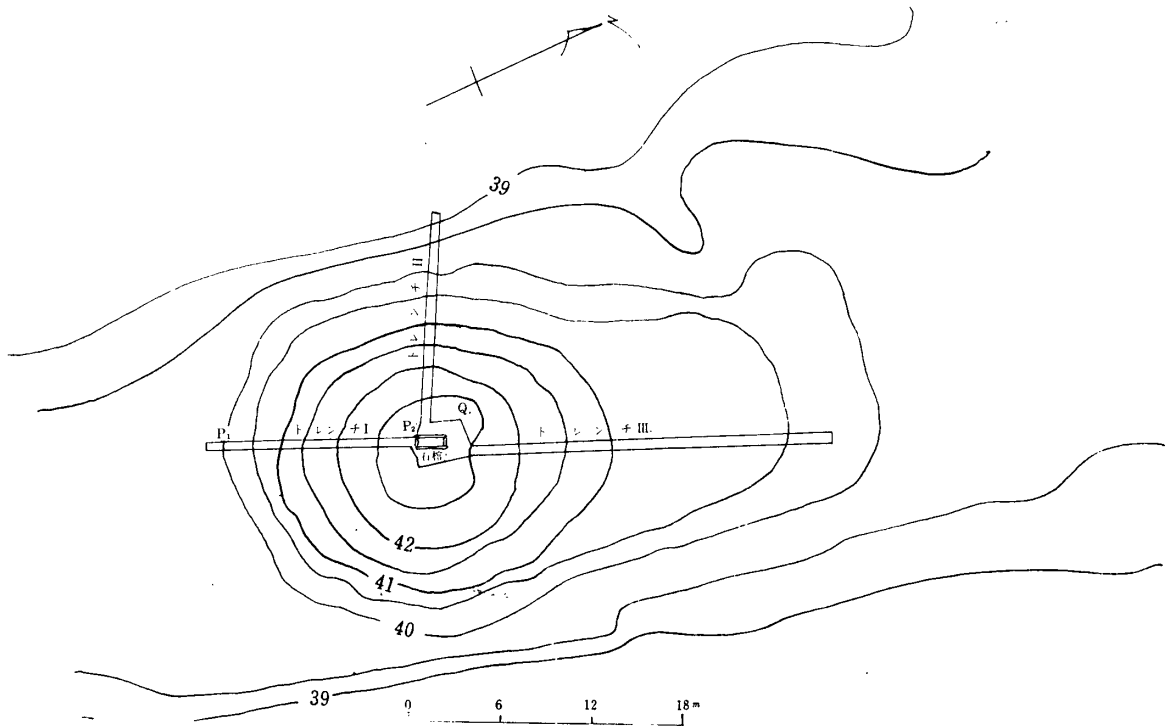
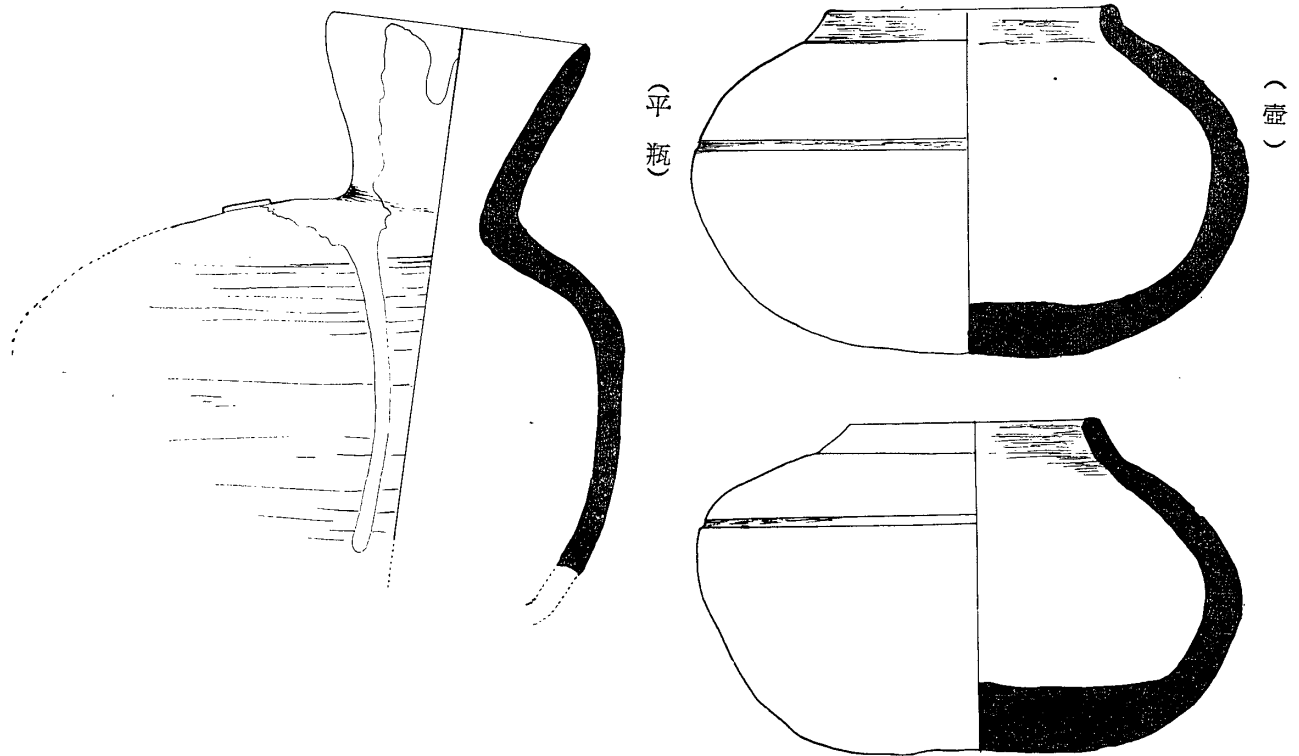


図10 大判山古墳平面図(数字は標高)



(坏)

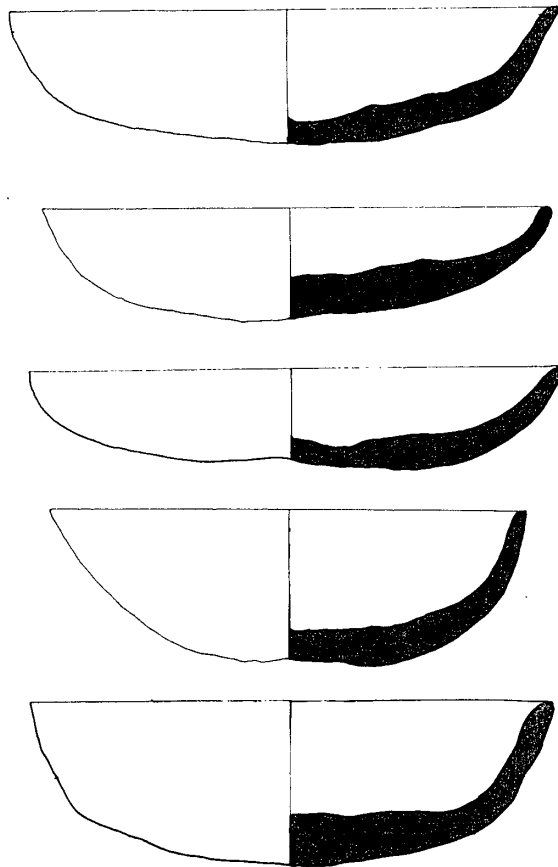


图 11 東高尾須惠窯址出土遺物実測図
縮尺 1/2